

# 今日から始める かかり釣り



数多いチヌ釣りのなかでも、ビギナーであっても釣果を得られやすいかかり釣り。一度チャレンジすれば、ヤミツキになること請け合いです!



潮の流れの速いところに掛けられていることが多いカセ。



大人数が乗れる筏なら、グループ釣行にも最適。



近年チヌ釣り師から注目を浴びている、かかり釣り。湾内に設置された筏・カセ（小舟）の上から楽しむこの釣りは、他の釣法に比べて抜群に釣果率が高いことや、足場がよいために快適に釣りを楽しめるといったことが受けて、急激なフアンの増加を見せています。

## ■ かかり釣りにって、 どんな釣り？

チヌのかかり釣りとは、基本的には湾内に設置された筏・カセで行う紀州・タンゴ釣りです。筏・カセは、真珠や牡蠣の養殖コワリ周りや魚礁の上、貯木場付近など魚影の濃いポイントにアンカーで固定されており、渡船を利用して渡ります（カセは、船でポイントまで引つ張っていくところもあります）。そこで付けエサをタンゴで包んで投入し、チヌのタンゴである海底付近まで落として本命に口を使わせるのです。オモリの役割も兼ねたタンゴによって付けエサはエサ取りからガード

され、またタンゴ自体の濁りと匂いで魚を集めて活性を高めるため、非常に合理的な釣法といえるでしょう。たとえビギナーであっても条件によっては三ケタ釣りが楽しめ、50m以上の年無しクラスを釣り上げることも珍しくないのです。

竿出しができる定員は、場所によっても異なりますが、筏が5〜10人で、カセは2〜4人というのが一般的。トイレが設けられた筏も増えてきているので、最近は女性客も多く見られるようになってきました。

## ■ タックルなどの 装備は？

タックルに関しては、図の「標準的なかかり釣りタックル」を参照ください。竿は足下を狙う釣りであることから、独特の短竿を使います。最初の本を購入するのであれば、オールマイティに使える1・6m前後のものがよいでしょう。

リールは仕掛けを飛ばす必要がないためスピニングリールではなく太鼓リールが小型の両軸タイプを使用。ラインは、道系ハリス通しが基本です。2号を基準に、狙う（釣れる）チヌのサイズによって選択してください。ハリスはチヌバリが代表的。エビ類やイソメなどの活きエサを使うときは、エサが弱りにくい細軸タイプを選ぶとよいでしょう。サイズは3〜5号を標準に考え、ライン同様に狙うチヌの型に合わせるように、使うエサに際しても変更するようにしましょう。オモりは潮流などの状況に合わせて、完全フカセ（オモリ無し）から3号程度の中通しオモリをセットします。

その他の用意しておくべき小道具としては、タンゴをつくるためのパツカン、水くみバケツ、腰掛けや竿受け、それに尻宇口1フなどがあります。また、玉網も磯釣りなどで使うような長いものではなく、1mほどの柄が短い専用タイプを用意しておいたほうがよいでしょう。屋根のない筏の場合は、パラソルがあると便利です。



ダンゴの仕上がりで、釣果は大きく変わります。

## ■ ダンゴと 付けエサは？

かかり釣りにおいて、もっとも重要といえる存在が、付けエサを包むダンゴです。さきほど紹介したとおり、ダンゴにはオモリ、付けエサのガード役、魚を集めて活性を高めるという3つの大きな役割がありますが、ベースエサ、ブレンドエサの選択次第で仕上がるダンゴの性質が大きく変わってくるため、ダンゴづくりひとつで、その日の釣果が左右されるといっても過言ではないのです。たとえば、水深のある釣り場なら、重く、沈下の速いダンゴに仕上げることで手返しが早まるなどのメリットが生まれますが、エサ取りの活性が高いときに必要以上に集魚力を強めすぎると、釣れてくるのはフグばかり、といった事態になりかねません。

ですので何よりも大切なのは、ベースエサ、ブレンドエサの特性をしっかりと理解した上でダンゴづくりを行うこと。具体的なブレンドパターンについては4ページからの「オススメ・ブレンド大公開！」にて紹介していきますので、ご参考にさせていただきます。

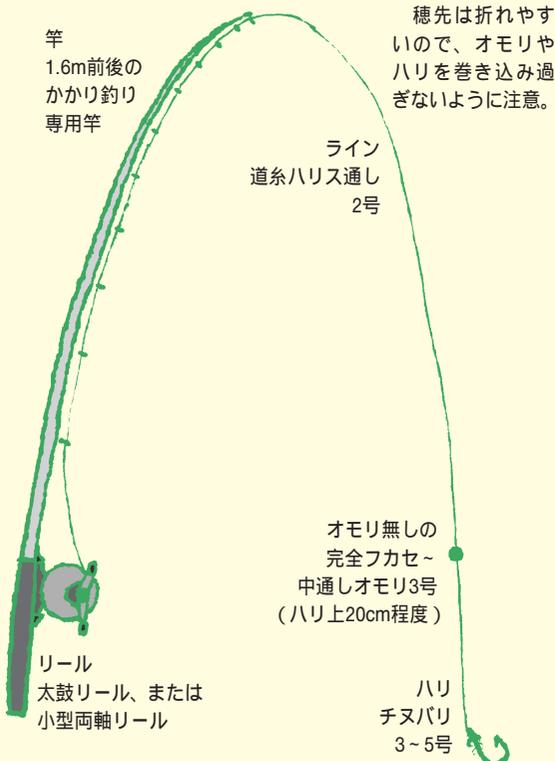
また、ダンゴが割れるタイミングも非常に重要です。沈下途中で割れてしまったり、着底してもなかなか崩れない、などということがないように、混ぜる水分量や握る回数で調整してください。

付けエサに関しては、かかり釣りにおいては「定番エサ」というのは存在しません。「くわせオキアミ」「スーパーハードチヌ」し

「ミラクルエース」などのオキアミや、「活さなぎ」などのさなぎ、「くわせ練りエサ・チヌ」などの練りエサ、「くわせコーン」などのコーン、「くわせアミエビ」「シリーズ」などのアミエビ、それにシラスエビ、ボケイガイ、アケミ貝、イソメなどさまざまあり、季節や場所によって、チヌの好みが大きく変化してきます。付けエサを選択する際には、釣行先の渡船店や現地の釣り具店などから情報を収集するのがベストでしょう。

また、一日を通して同じエサで釣れ続けることは滅多にありません。少なくとも2、3種類を常備するようにしておき、状況に応じてローテーションさせることが大切になってきます。

### 標準的なかかり釣りタックル



付けエサの、ほんの一例。バリエーション豊かに用意しておきましょう。

# 今日から始める かかり釣り

## ■ 実際に 釣ってみよう!

さて、ここからは釣り場での、実際の釣りの流れについてお話していきましょう。

釣り座にいたら、タックルの準備をするよりも先に、まずはダンゴづくりに取りかかってください。筏・カセに渡った時点ではまだ魚が寄っていないため、ダンゴのカラ打ちをして、ポイントづくりをする必要があります。また、竿出し後しばらくも同じ理由から、釣りをしながらダンゴの追い打ち（追加打ち）をしたほうが効果的です。

タックルの準備が終わったら、いよいよ本格的に釣り開始。付けエサをダンゴで包んで投入するわけですが、このときは筏・カセを問わず、ソッと水面に置くような感じで落

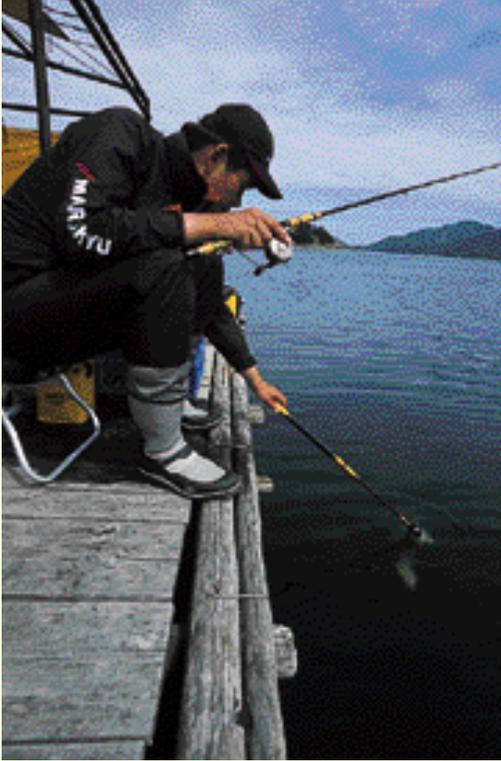
としてみてください。派手に投げ込むとダンゴの着水音でチヌに警戒心を与えかねませんし、衝撃でダンゴが割れてしまう可能性があります。カセでは危険でない程度に身を乗り出し、筏ではヒシヤクにダンゴをのせて沈めてください。

次に、チヌの本アタリについて解説していきます。チヌの「コツッ」という感じの前アタリがあるのが特徴。かすかなアタリですので見逃してしまふことが多いのですが、この「コツッ」があれば、まずはチヌが食ってきているとみていいでしょう（ただし、ベラの場合も同じような前アタリが出ます。チヌ釣りは遅合わせが基本ですので、この段階ではまだ送り込まず、しばらくは我慢次の「ククーッ」という押さえ込みが出た

ら、少し送り込んでから大きく合わせを入れるようにしてください。本命を掛けてしまえば、あとはこちらのもの。チヌのパワーがダイレクトに伝わってくる短竿独特のやり取りを味わいながら、慎重にタモ入れしてください。

チヌのかかり釣りは、入門が容易で比較的簡単にチヌが釣れる釣りですが、突き詰めれば非常に奥深い釣りでもあります。一匹を仕留められたなら、さらにもう一匹を、30cm級を釣ったなら、次は40cm級、50cm級を……。自分なりに工夫を重ねて、よりよい釣りをお楽しみください。

煙幕を引きながら沈んでいくダンゴ。  
投入は、ソッと優しく……。



四季を通して楽しめるかかり釣り。  
チャレンジしない手はありません!

